13　次の文章は主人の『』の一節で、が女性や子供の求めに応じて『徒然草』第七十三段を講義している。これを読んで、後の問いに答えよ。

　〈広島大〉二〇二三年度出題

　これにつきて一つの物語こそおはしけれ。日も高く侍れば、に語り侍る①べし。

　しころ、に知るよしもてる人の、に居ながら、かの国にいます神の社をせんの宿願にて、アとてもの事にの本式に作らばやと、そのかた学び明らめたるを招き、「かの国へ行きて建ててよ」と頼まれしに、かの申すは、「り侍れども、それがしるに及ばず。絵図を写してやり、かの国、近国などの工にとはせ給へ。そのままひ侍らば、それがしが作りたるに相違ある②まじ。さすれば、往返旅用のをき、それがしも推飯のわづらはしきを免るる」といへば、もとて、て一片のを写して、かの国に遣しぬ。日を経てかしこより、人の工に尋ねたるよしとりどりの内に、「かやうのむつかしき神社、の及ばざる所」と、辞し③ぬるも多く、「絵図のごとく少しもへず建て侍らん。工料何貫目」など書けるもあり。一人がふは、「この絵図の通りには出来侍らず。もし柱数今一本を増してならば、この通りにつかふまつらん」と書けるあり。かの棟梁を招きて見せしむるに、手を打ちて、「さればこそかの国はに隣りて、心にくき工ども侍りけれ。Ａあの肖図かねて柱一本を残して書けり。絵図のごとく作らんといふは、法を知らざる工なり。柱一本増さばといへるこそ、法知れる工なれば、これに命じ給へ。我遠く行くに及ばず」といへるとかや。

　Ｂこれをもて書を考ふるに、書ごとに誠のみを書かば、見る人の力も入らず、学問工夫も荒かりぬべし。されば、の説き給ふ経は、四十九年未顕真実と自らにひぬれば、誠のみを説けるにあらず。地獄天堂の沙汰も、イいかさまにも誠としがたし。されば、儒家よりは釈氏の悟らしむるといふは、もと迷はざるものを迷はしめて、後にくその迷ひをわかつなり。それは、をやむものの水に洗ひて楽しめるにして、それよりは癰疽なから④んにはしかじなどいへど、にも『』はなき事を設けて、六十四三百八十四を立て給へるも、事はかはれども虚をもて実を説く所は相同じ。『』がも、もしの人これを誠とせば、大いに誤りを伝ふべし。わが朝に古く伝へたるとてもく信ぜば、て惑ひの種ならん。されば、その要心にと称して、痴人面前に夢を説かざるは尤もにや。

　『　　Ｘ　　』もこれにして、ははきぎの有りとは見えてあはぬをかたどり、誠かと思へば虚談にて、偽りかとおもへば実語なり。その虚実は見ん人の心に味はひて、これを甘しともしともめ分けて、その善を見てはせよといは⑤ねども、憤発してこれにひとしからん事を思ひ、悪を見ては禁ぜざれども、して内に自ら省みてこそ、書をよめる徳とも成りぬべし。されば、この『つれづれ草』にも、初めに、「ならぬこそはよけれ」と書き、「色好まざらんをとこは、ウさうざうしく」など書きて後に、「ただ色好まざらんにはしかじ」と書き、「百薬の長といへど、万のは酒よりこそおこれ」「善根を焼く事火のごとくにて、悪をまし戒を破る」など、尤もＣ抑揚の筆法ながら、一方ならず書ける、殊に心ある所とこそ覚え侍り。

　この草紙のみに限らず、の群書を見んもの、これは実録なりとて悉く信じ、これはなりとて皆捨てんは大なる誤りにて、泥の濁れるを見ての清きをしらぬ類なるべし。の聖典の深き事は、なにがしが明らかに知り侍らぬ事なれば、く置く。近く歌物語、軍記など、その外がエ筆ずさみてふものなど見んには、その真偽虚実を論ぜず、書けるものの意趣のある所に心をつけて、繰り返し侍れば、千年の後に生れて千歳の前の人に対面するして、自ら心も慰みつれづれも忘るるなれ。仮にも偽りを嫌ふは君子の志なれば、これを否といふにはあらねど、一様に心得るはＤのちやあるらん。

注　戸田茂睡……江戸時代前期の国学者・歌人。革新的な立場から『』を著し、中世の歌学における制詞（和歌で使用を禁じられる語句）を根拠がないとして批判した。

『徒然草』第七十三段……「世に語り伝ふる事、まことはあいなきにや、多くは皆なり」から始まる章段で、人の話は不正確で大げさになりやすく、それが書物として残ると事実であるかのように信じられてしまうので注意すべきだと説く。

唯一宗源……室町時代後期に京都の吉田神社の神官吉田がおこした神道の一流派。

推飯……食事の準備をすること。

飛驒国……現在の岐阜県北部で、美濃国に隣接していた。飛騨の匠（大工）は高い技術を持つことで知られていた。

四十九年未顕真実……釈迦が『法華経』を説くまでの教えはすべて仮のものだった、とする教説。

無量義経……釈迦が『法華経』を説くための準備として説いたとされる聖典。

天堂……仏教にいう極楽浄土。

儒家よりは釈氏の悟らしむる……真実のみを説く儒家よりも、虚実を織り交ぜて説く釈迦や僧侶の方が人々を悟りに導くということ。

癰疽……悪性の皮膚病。

六十四卦三百八十四爻……儒教の経典の一つ『易経』にいう、占いに用いる基本図形である八卦の組み合わせ。

『荘子』が大鵬……『荘子』に登場する伝説上の巨大な鳥。

神代巻……天地などの神話の時代を描く『日本書紀』冒頭の巻。

深秘口決……深奥な秘密の教えは直接口頭で伝えるということ。

寓言……他の物事にことよせて意見や教訓を述べた言葉。

ははきぎ……伝説上の木で、遠くから見ればほうきを立てたように見えるが、近づくと見えなくなるという。

戦兢……恐れを感じて戒め慎むこと。

内外の聖典……仏教の聖典（内典）とその他の書物（外典）。

問１　二重傍線部①～⑤について、それぞれ文法的に説明せよ。

　　例　推定の助動詞「なり」の連用形

問２　波線部ア「とてもの事に」、イ「いかさまにも」、ウ「さうざうしく」、エ「筆ずさみてふもの」を現代語訳せよ。

問３　本文中の空欄Ｘには、平安時代中期に成立した五十四からなる長編物語の名前が入る。その名前を漢字で答えよ。

問４　傍線部Ａに「あの肖図かねて柱一本を残して書けり」とある。

１　現代語訳せよ。

２　棟梁はどのような意図でそのように書いたのか。本文の内容をふまえて説明せよ。

問５　本文内では傍線部Ｂ「これをもて書を考ふるに、書ごとに誠のみを書かば、見る人の力も入らず、学問工夫も荒かりぬべし」をふまえ、虚構を含む書物として仏教や儒教の聖典の例を挙げているが、これらに共通する特徴は何か。本文から十字以内で抜き出して答えよ。

◎問６　傍線部Ｃに「抑揚褒貶の筆法ながら、一方ならず書ける、殊に心ある所とこそ覚え侍り」とある。

１　「抑揚褒貶の筆法」とはどのようなことか。本文の内容をふまえて説明せよ。

２　筆者は「抑揚褒貶の筆法」をどのように評価しているか。説明せよ。

◎問７　傍線部Ｄ「膠柱の過ち」について、「柱」は琴の調子を変えるための、「膠」はで固定することをいう。本文の内容をふまえ、ここでの意味を百字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　①＝意志の助動詞「べし」の終止形

　　　②＝打消推量（打消当然）の助動詞「まじ」の終止形

　　　③＝完了の助動詞「ぬ」の連体形

　　　④＝婉曲の助動詞「む（ん）」の連体形

　　　⑤＝打消の助動詞「ず」の已然形

問２　ア＝どうせ同じことなら　　イ＝どう考えても

　　　ウ＝物足りなく（て）　　　エ＝慰み書きという書物

問３　源氏物語

問４　１＝あの設計図はあらかじめＡ柱が一本足りないように書いた

Ａがなければ全体０。「肖図」「かねて」「書けり」の訳の不備は各減点２。

２＝Ａ不完全な設計図を見せて、柱が一本不足していることを見抜くことができる優秀な大工を選別し、Ｂ主人からその人に施工を依頼させる意図。

Ａがなければ全体０。

Ａ＝８〔「図を見て柱不足を見抜ける優れた大工を選ぶ」という趣旨であれば可。〕

Ｂ＝２〔文末の「～意図。」（「～するため。」も許容）があれば、「主人から～させる」の説明はなくても可。〕

問５　虚をもて実を説く所（９字）

問６　１＝Ａ同じ書物の中で、Ｂ酒好きや色好みについて、褒める記述がある一方で、けなす記述もあるというように、Ｃ相反する内容が併存する書き方のこと。

ＢとＣがなければ全体０。

Ａ＝４〔「同じ作者」という説明も可。〕

Ｂ＝４〔「酒好きや色好み」がないものは減点２。〕

Ｃ＝２〔「相反する（矛盾する、一方に決めつけない、など）」があれば可。〕

２＝Ａ事の善し悪しを一方に決めつけず併記する筆法が、Ｂ善を目指し悪を反省するという、読書による徳の観点からも、Ｃ格別に道理をわきまえた書き方だと高評価している。

ＡとＣがなければ全体０。

Ａ＝４〔「善悪を決めつけない書き方」という趣旨があれば可。〕

Ｂ＝２〔同内容可。これとは別の説明であっても柔軟に認めてよい。〕

Ｃ＝４〔「心あり」の説明の不備は減点３。〕

問７　Ａ優れた書物は虚実ない交ぜに書かれており、Ｂ作者のその考えや趣向を繰り返し味わうのがよく、Ｃ虚実のみを一方的に判断する読み方は、琴柱を糊で固定するのに等しい、Ｄ柔軟性を欠く間違った方法だという意味。（95字）

ＣとＤがなければ全体０。

Ａ＝２

Ｂ＝２〔本文の26～28行目の内容に触れていれば可。〕

Ｃ＝３

Ｄ＝３〔「間違った」と同趣旨の内容があれば可。〕

【現代語訳】

　これについて一つの物語がございました。日も高いですから、ついでに語りましょう。

　昔、美濃国に領地を持っている人が、東国にいながら、あの国（＝美濃国）にいらっしゃる神の社を建立しようとの宿願で、問２アどうせ同じことなら唯一宗源（＝神道の一流派）の本式に（則って）作りたいと、その方法を学んで会得している棟梁を招き、「あの国（＝美濃国）へ行って建ててくれ」と依頼なさった時に、その棟梁が申すには、「恐縮ですが、私は参るには及ばない。絵図を写して送り、あの国、（また、その）近隣の国などの大工にお尋ねなされ。（大工が）そのまま引き受けますならば、私が作ったものと違いはないだろう。そうすると、（美濃国までの）往復の旅費を省き、私も食事の準備をするわずらわしさから解放される」と言うので、もっともだと思って、すぐに一枚の設計図を書いて、あの国に送った。何日かたってあちら（＝美濃国）から、数人の大工に尋ねた旨のとりどりの（報告の返事の）中で、「このような面倒な神社は、拙い大工（である私）の及びもつかないこと」と、辞退したものも多く、「絵図のとおり少しも違えずに建てましょう。工賃は何貫目」などと書いたものもある。（その中でも、ある）一人が言うには、「この絵図のとおりにはできません。もし柱の数をもう一本増やして（よいの）ならば、このとおりに造り申し上げよう」と書いたものがある。あの（最初に依頼した）棟梁を招いて（その返事を）見せると、手を打って、「思ったとおりあの国は飛驒国に隣接して、優れた大工たちがいますなあ。問４１あの設計図はあらかじめ柱が一本足りないように書いた。絵図のとおりに作ろうというのは、（唯一宗源の）方法を知らない大工である。柱一本増やすならば（造ることができる）と言った大工こそが、方法を知っている大工なので、この人にお命じなされ。私が遠く（まで）行く必要はない」と言ったとかいうことだ。

　以上のことによって書物を考えると、すべての書物が真実だけを書くならば、読む人の（読解）力も高い域には達せず、学問の工夫もきっとすさむだろう。そもそも、釈迦が説きなさる経は、四十九年未顕真実（＝『法華経』を説くまでの教えはすべて仮のものだった）と自ら『無量義経』でおっしゃっていたので、真実だけを説いたのではない。地獄極楽についての記述も、問２イどう考えても真実と認めがたい。だから、（真実のみを説く）儒家よりも（虚実を織り交ぜて説く）釈迦や僧侶（の方）が（人々を）悟りに導くというのは、もともと迷っていない者を迷わせて、後でだんだんとその迷いを解き明かすのである。それは、癰疽（＝悪性の皮膚病）を患う者が（患部を）水で洗って気持ちよく感じるの（と同じ）であって、それよりはただ癰疽がないのに越したことはないだろうなどというが、儒書でも『易（経）』は存在しないことを想定して、六十四卦三百八十四爻（＝占いに用いる基本図形である八卦の組み合わせ）を設定なさっているのも、事象は異なっているが「虚」を使って「実」を説くところはほぼ同じである。『荘子』（に登場する伝説上）の巨大な鳥も、もし愚鈍な人がそれを実在だと思っ（て人に話し）たならば、大いに誤りを伝える（ことになる）だろう。わが国で古くから伝え（られ）ている（『日本書紀』の）神代巻にしてもすべて信じるならば、かえって困惑の種であろう。だから、その要心として深秘口決（＝深奥な秘密の教えは直接口頭で伝える）と称して、愚者の面前で夢（と同様の不確かなこと）を説かないのは当然のことではないか。

　『源氏物語』もこれまた寓言（＝他の物事にことよせて意見や教訓を述べた言葉）であって、帚木があると見えて（近づくと）見えなくなるということを象徴的に使い、真実かと思えば作り話であって、作り事かと思うと実話である。その虚実は読む人の心で味わって、これを甘いとも酸いとも嘗め分け（るようにして読み分け）て、その善を見ては（その真似を）「しろ」と言わなくても（やはり）、発憤してそれと同等であることを願い、悪を見ては禁じなくても（やはり）、恐れを感じて戒め慎んで（心の）内に自省して、書物を読んだ（ことで得られた）徳ときっと成るだろう。だから、この『徒然草』にも、初めに、「男は酒が飲めなくないのがよい」と書き、「好色でない男は、問２ウ物足りなくて」などと書いて（その）後に、「ただ好色でないに越したことはない」と書き、「百薬の長といっても、あらゆる病気は酒からおこる」「（酒は）果報をもたらす前世でのよい行いを火のように焼き尽くしてしまい、悪を増し戒律を破る（事態を招く）」など、たいそう抑えたり揚げたり褒めたりけなしたりの書き方であるが、一方に偏らずに書いてあるのは、特に道理をわきまえたところだと思われます。

　この草紙だけに限らず、日本や中国の多くの書物を読む者が、これは実録だと思ってすべてを信じ、これは戯れに作った話だと思ってすべて信じないとしたら大いなる誤りであって、泥が濁っているのを見て蓮の清さを知らない類であるに違いない。仏教の聖典（内典）とその他の書物（外典）の深いことは、私が明らかには知らないことですから、しばらくとりあげないでおく。（それよりも）卑近な歌物語、軍記など、そのほかさまざまな人の問２エ慰み書きという書物などを読むならば、その真偽や虚実を論じず、書いてあるものの考えや趣向のあるところに注意して、繰り返し（読み）ますと、千年の後に生まれて千歳年上の人に対面する気持ちがして、自然と心も慰められも忘れるのだ。仮にも偽りを嫌うのは君子の志であるから、これを駄目だというのではないが、一つの見方だけで理解するのは琴柱を膠で固定するような過ちであるだろうか。